2023年11月6日

指定管理者協会秋の公開セミナー特別編

敦賀市知育・啓発施設「ちえなみき」見学会レポート

協会が毎年4回、①2月の社員総会時、②春（5～6月）、③10月の研究（「提言」）発表会時、④秋（11月）に実施している「公開セミナー」ですが、今秋は特別編として施設見学会として実施しました。これは、R5年春の公開セミナーで大阪公立大学の佐野修久教授がご講演で触れられた「単なる公共施設の整備と維持管理ではなく、公共施設を使い質の高いサービスの提供を目指す動き」の代表的手法として「運営者先決め型PPPがあり、そのよい例が「ちえなみき」であるということから実現したものです。以下、レポートします

小雨模様の残念な天気となった11月6日（月）の14時に現地集合したのは協会会員会社からの12名でした。佐野先生もアドバイザーとして同行いただきました。到着を迎えて下さったのは、敦賀市の都市政策課のお二人と丸善雄松堂の現地責任者のお三方でした。この後、ミーティングスペースでまず、佐野先生から今回の狙いを、市からは整備コンセプトから完成までの経緯など懇切丁寧なご説明が質疑を含め約1時間強あり、その後現場の見学を1時間強、お三方とも終始付添い適宜説明を加えられ、終了は16時20分でした。

敦賀駅西地区土地活用事業は、PPP事業として2022年9月1日に開場しました。この事業の目的は、来訪者にとっては気比神社や港エリアという観光スポットへの玄関口として、市民にとっては普段使いの拠点として、敦賀駅前に交流と日常的な賑わいを生み出すこと。もちろん2024年3月16日に迫った北陸新幹線の延線開業という大きな動きがきっかけとなっている。

整備スキームは民間事業者が事業用定期借地として私有地を賃借し、その上に施設を整備、整備された施設の一部に市がテナント・公設民営書店「ちえなみき」として入居し賃借料を払っている。そしてその「ちえなみき」の管理・企画・運営は指定管理者として丸善雄松堂・編集工学研究所共同事業体が担っている。そしてここの公の負担（テナント賃料、指定管理料）は、このエリアで生み出された資金（定期借地料、立体駐車場の納付金など）でバランスを取っている。

そんなスキームのもとで、憩いの芝生広場を中心にコの字型に施設（ホテル、飲食・物販施設、子育て支援施設、ちえなみき）が整備され、全体に回遊性のある屋根付き歩道で結ぶことで、景観的にのも空間的にも連続性のある街並みを形作っている。

この事業の中核として整備された「ちえなみき」は、年間1０万人の当初目標に対し3倍の実績を上げています。

「ちえなみき」は知育・啓発施設という新しいタイプの公立施設を目指し、公設民営書店という形式を選択したものです。社会の変化の中で書店が減少する中で、売れ筋の本や雑誌は置かず、良質な知にアクセスする知的・情報インフラとしての存在を目指すものです。

本との出会いの中で、新たな気づきを得る（啓発）、何かを学び創造する（知育）ことがコンセプトとなっています。その先に本を通じ「人」と「地域」と「世界」が繋がる、新しい知の拠点を目指しています。

書店形式を選択したのは、図書館法に縛られない自由度を獲得し、蔵書を抱え込まず新陳代謝を図りつつ変化対応し、書籍売り上げが財政負担の軽減にも繋がるとからとの説明がありました。

「ちえなみき」の根幹は「選書」と「空間構成」の独自性にあります。吹き抜け空間を縦・横に書棚が伸び、それは世界樹をモチーフにしているとのこと。1階の主要部分は「世界知」として「文化・生活」「歴史・社会」「生命・科学」の3つのステージに42のテーマが連なり人類の叡智を辿る文脈を構成しています。そこに古典・ロングセラー、絶版本、絵本などが古書、新刊を問わず並んでいます。

また本棚も工夫があり「違い棚」「格子戸」「引き出し」などをうまく配置し、発掘する面白さが生まれるようになっています。

こうした「ちえなみき」の特徴は、検索やアプリで最短距離で到達できる知ではなく、遠回りでも自らが探検、探索、探訪した末にたどり着くものとして、予定調和ではない見知らぬ土地をガイドなしに散歩して発見できるものに通じるワクワク感ドキドキ感ががあるように感じました。

指定管理者協会セミナー委員　篠原 慎一